11　折口　信夫文学碑

■場所

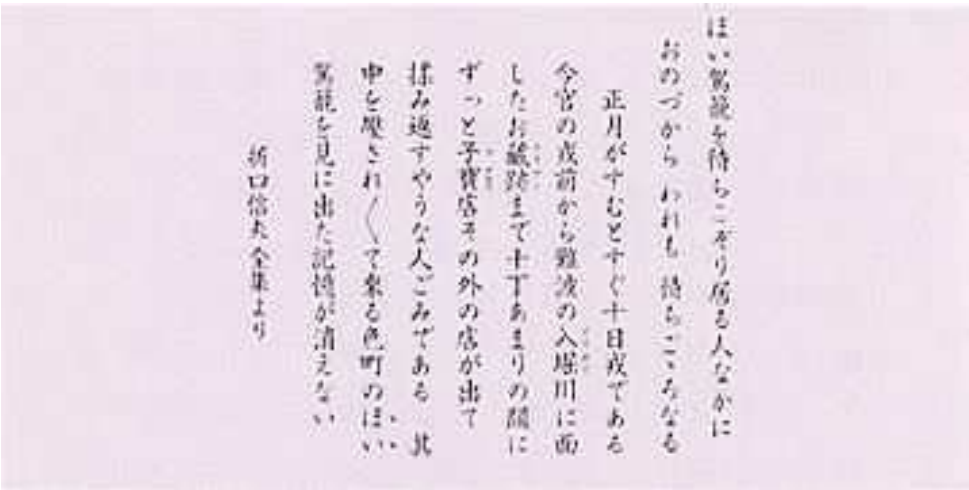
浪速区敷津西一丁目

鷗町公園内

■交通

地下鉄：大国町

（2 号出口）


ほい駕籠を待ちこぞり居る人なかに
おのづから　われも　待ちごころなる
正月がすむとすぐ十日戎である
今宮の戎前から難波の入堀川に面
したお蔵跡まで十丁あまりの間に
ずっと子寶店その外の店が出て
揉み返すやうな人ごみである　其
中を壁され〳〵て来る色町のほい
駕籠を見に出た記憶が消えない
折口信夫全集より

折口　信夫(1887 年～1953 年)

折口信夫は、明治 20 年(1887 年)大阪府西成郡木津村(現大阪市浪速区敷津西一丁目)に生まれ、昭和 28 年(1953 年)9 月 3 日死去した。

木津尋常小学校(現敷津小学校)、育英高等小学校(昭和 12 年廃校)、天王寺中学校(現天王寺高等学校)を経て、国学院大学にすすんだ。

小学校時代から古典をはじめ広く文学に親しみ、中学校時代には、校友会誌『桃陰』に「都賀野の牡鹿」を発表するなど、早くから鬼才を発揮した。

明治 43 年大学卒業後、今宮中学校(現今宮高等学校)に勤め、この間、柳田国男主宰の『郷土研究』に「三郷巷談」を発表し、以後、知遇を得た。

大正 10 年、国学院大学教授となり、また、同 12 年には慶応義塾大学の講師(昭和 3 年教授となる)を兼任し、死去するまで両大学の教授を勤めた。

その間、昭和 7 年「万葉集に関する研究」で文学博士の学位を取得するなど、「折口学」と呼ばれる民俗学を基盤とした独自の学風を国文学の世界に展開し、日本民俗学の創成に不滅の貢献をなした。

一方、釈迢空の筆名で、歌詠に古語を駆使して日本語の美しさを訴え、「海やまのあいだ」「春のことぶれ」「倭をぐな」などの歌集を出版。また、詩集には「古代感愛集」「近代悲傷集」などがあり、小説には「折口学」の集大成といわれる「死者の書」がある。

碑文は、折口信夫全集第 28 巻の中の「増井の清水の感覚」と題した文におさめられており、今宮神社十日戎の雑踏に托して、年のはじめの浪華の行事を詠んだ短歌と文章である。

墓所は、石川県羽咋市一ノ宮の地にある。大阪市浪速区大国三丁目の願泉寺には、分骨埋葬されている。